

ドイツ語圏の 日本学における神社に関する研究

Works on Shintô Shrines in German Japanese Studies

ウルズラ・フラッヘ

江口大輔 [訳]

Ursula FLACHE Translated : EGUCHI Daisuke

- ① 歴史的概観
- ② 靖国神社論争
- ③ 神社の建築について
- ④ 参考文献目録

【論文要旨】

本論文ではドイツ語圏の日本学の中で行われている神社研究の、創成期から現在に至るまでの概観である。ドイツ語圏の日本学では、日本の宗教についての研究は部分的な領域をなすに過ぎない。神社に限定した研究はさらに稀である。したがって研究の成果は非常に限られている。神社はたいして神道のその他の研究との関連で言及される。歴史的概観は4つの節に区分されている。第1節では日本についての初期の報告（ケンペル、シーボルトなど）を紹介する。第2節では明治時代から第二次大戦までの研究文献を説明する。明治時代における神社研究に関してフローレンツ、シラー、シュアアハマーとローゼンクランツを列挙する。続いて、グンデルト、ポーネルとハミッチュという第二次大戦前の指導的な神道研究者について述べる。彼らがナチスのイデオロギーに近い視点から研究結果を発表したため、戦後には神道と関わる研究がタブー視された。第3節は戦後の研究文献を説明する。神道研究はしばらくの間完全に中止されていたが、ウイーン大学における民俗学を迂回することによって、神道はようやく日本学研究の中に復活した。ウイーン大学を卒業したナウマンが戦後の最も影響力のあった神道研究者となった。さらに、国家と神道の関係を研究したロコバントが神社研究に大きな貢献をした。第4節では20世紀の終わりから現在までの研究文献を紹介する。現在の指導的な神道研究者としてアントーニとシャイドの名前を挙げるができる。

戦争の経験を通じてドイツと日本は同様に過去の克服という問題に直面している。そこでドイツ語圏の日本学で靖国神社に関する論争は特に注目されている。本論文では歴史的概観を続けて靖国神社研究の概説を行う。終わりに神社建築研究について手短かに概略を記す。

以下で行われるのは、ドイツ語圏の日本学の中で行われている神社研究の、創成期から現在に至るまでの概観である。ドイツ語圏の日本学では、日本の宗教についての研究は部分的な領域をなすに過ぎない。神社に限定した研究はさらに稀である。したがって研究の成果は非常に限られてい⁽¹⁾る。神社はたいてい神道のその他の研究との関連で言及される。歴史的概観は以下のように区分される。

- ・日本についての初期の報告
- ・明治時代から第二次大戦まで
- ・戦後
- ・20世紀の終わりから現在まで

以上の概観に続けて、靖国神社研究と神社建築研究の手短かに概説を行う。

①……………歴史的概観

日本についての初期の報告

エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651-1713) やフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796-1866) といった初期の日本旅行者が、日本に関する記録の中で日本の宗教について、また神社についても報告している。ケンペルは1690年から1692年まで医師として長崎出島のオランダ商館で働いた。クラウス・アントーニが最初にケンペルの著作を江戸時代の神道に関する資料として参照した⁽²⁾。ケンペルの主著はまず英語の翻訳で1727年に『日本の歴史』(The History of Japan) の書名で出版された。1777年と79年にクリスチアン・ヴィルヘルム・ドームが、彼の手により編集された全2巻のドイツ語版を『日本誌—日本の歴史と紀行』(Geschichte und Beschreibung von Japan) の書名で出版した。2001年になってようやくケンペルの手稿を元にした批判校訂版が『今日の日本』(Heutiges Japan) の書名で、全2巻で出版された。その第1巻第3冊は宗教一般の研究で、特に神道について掘り下げている。第2章が扱うのは「神道の神社、信仰、祭式について」⁽³⁾である。ケンペルは鳥居と手水舎とともに建築物の外観について詳細に書き記している。彼はまた、宮、社(やしろ、しゃ)、神社などの様々な名称を挙げている。さらに、神主、唯一神道、両部神道、お祓いについても記されている。ケンペルは眼の確かな観察者である。例えば神社建築についてある箇所ではこう書かれている。「神社それ自体は全く壮麗でなく、単純な材木からなる。それは小さな四角い小屋に過ぎないこともよくあるが、美しく堅固な梁によって建てられている。正面は二枚の格子戸からなり、そこを通して人々は中を見、祈りを捧げることができる。戸は常に閉ざされ、神主や奉公人がいないこともしばしばである。」⁽⁴⁾第3冊の第4章は伊勢参りを集中して論じている。

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトもオランダ政府への勤めにより1823年から1830年に出島の医師として活動した。彼の主著『日本—日本とその隣国』(Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan) はまず1832年から35年にかけてライデンで7巻構成で出版され、1897年ヴェルツブルクおよびライプツィヒで2巻構成にて再び出版された。ヴェルツブルク版の第2巻の第5節では日

本の宗教を扱っている。シーボルトは其中で詳細に神道について記述し、祭事、著名な参詣場所、神社建築、神主の外見や仕事、多様な神格について書いている。

ドイツ語圏の日本研究でのさらなる開拓者の業績を、オーストリアの東洋学者アウグスト・フィッツマイアー (August Pfizmaier, 1808-1887)⁽⁵⁾ が、数多くの翻訳とともに残している。フィッツマイアーは特に日本文学の翻訳を行った。その中には日本の小説が最初に西欧語に翻訳されたものも含まれている⁽⁶⁾。神社についてフィッツマイアーが直接論じたことはないが、彼は栗田土満の日本紀注釈書『神代紀葦牙』と本居宣長の古事記注釈『神代正語』、そして中臣祓の三つの祝詞を翻訳している。

残念ながらフィッツマイアーの業績を活用するには苦勞を要する。彼の翻訳は日本語原典に密接に依拠していて、優雅に読みこなすことはできない。さらに彼の翻訳はたいい帝国学術アカデミーの議事報告や紀要にいくつかの続き物として分載されている。フィッツマイアーは個々の続き物に自身が考案した題をつけたので、翻訳がどの日本語原典に対応するのか知るのが難しい。

明治時代から第二次世界大戦まで

明治時代の1872年、日本に日本アジア協会 (Asiatic Society of Japan) が設立された。一年後の1873年、ドイツによる同様の協会であるドイツ東洋文化研究協会 (Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, OAG) が成立した。その会員はドイツ人商人や外交官から成っていた。協会の目的は、日本についてもっと学ぶことと、日本でのドイツの立場を強化することだった。OAGの二つの情報機関、ドイツ東洋文化研究協会報告 (Nachrichten der Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, NOAG) とドイツ東洋文化研究協会報 (Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, MOAG) は、戦争による中断を経て現在まで存続している⁽⁷⁾。これらは今も変わらずドイツ語圏日本学における重要な機関である。

1887年に、ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム王立大学で東洋語講座 (Seminar für Orientalische Sprachen, SOS) が開講された。ルドルフ・ランゲ (Rudolf Lange, 1850-1933) が日本語教師であった。カール・フローレンツ (Karl Florenz, 1865-1939) ははじめベルリンのSOSで学んだ。1891年に彼は東京帝国大学のドイツ文学と比較言語学の正教授となった。日本での滞在中彼は先述のOAGの非常に活動的なメンバーであった。彼は講演を行い、研究を出版し、様々な役職を引き受けた。1914年彼はハンブルグで初の日本学の教授の座を得て、1935年に解任されるまでその地位を占めた。研究で彼は日本の文学、歴史、そして宗教に取り組んだ。彼の主要な業績は、古事記と日本紀の原典の大部分をドイツ語に翻訳したことである⁽⁸⁾。その意味で、ドイツの日本学が神道研究とともに始まったと述べてもあながち間違いではない。

『宗教史教本』 (Lehrbuch der Religionsgeschichte) の中に収められたフローレンツによる神道についての論文には、神社を扱った一章が含まれている。その章の記述は非常に詳細である⁽⁹⁾。歴史的な発展、様々な神社建築の類型、神社施設の構造、社格制度、そして神社の財政について記述されている。さらにこの章の中では、例えば祭りや供物との関わりで、あるいは中世の神仏習合や国家神道を論じた部分で、数多く神社についての言及が見られる⁽¹⁰⁾。

エミール・シラー (Emil Schiller, 1865-1945) は1911年に『日本の民族宗教 神道』(Shinto die Volksreligion Japans) という題の入門書を執筆した。この著作にはプロテスタントの伝道師としてのシラーの立場が色濃く反映されており、厳密な学術書とみなすことはできない。「神聖な場所」⁽¹¹⁾の章で彼は神社施設の典型的な構造について、建築物の様々な機能とともに記述しており、また伊勢神宮や伏見稲荷大社などの有名な神社の名を挙げている。この本にはまた一連の写真が載せられている。

1923年には『神道. 日本における神々の道. 16, 17世紀に來日したイエズス会伝道師たちの、印刷されたもしくは印刷されていない報告書による神道』(Shin-tô. Der Weg der Götter in Japan. Der Shintoismus nach den gedruckten und ungedruckten Berichten der japanischen Jesuitenmissionare des 16. und 17. Jahrhunderts) という本が出版された。イエズス会士ゲオルグ・シューアハマー (Georg Schurhammer, 1882-1971) によるこの著作はドイツ語と英語の本文を並列して載せている。神話と神々についてのテキストがとりわけ多く含まれているが、神社への言及も数多い。本の最後にはさらに、神社の施設や様々な神社の建築様式への言及、そして日光東照宮などの著名な神社についての記述がある。この本はまた多くの写真を含んでいる。

国家社会主義時代には、ドイツ語で書かれた多くの神道研究所が、批判的距離を取ることを忘れていている。ドイツの日本学で指導的な立場にいた者たちは、国学およびそれに基づく日本のナショナリズムが与えた観点を、いくらか無批判に採用した。ベルンハルト・シャイドは、ヴィルヘルム・グンデルト、ヘルマン・ポーンネル、そしてハインリヒ・デュモリンらの著作の文体について考察し、次のような確認をした。「こうした表現は、日本のナショナリズムのイデオロギーを第三帝国の言語に置き換える試みとしてししか解釈ができない。ここからさらに推測されるのは、ドイツ語圏の研究者たちが、意識的あるいは無意識的に、両方のイデオロギーに奉仕しようとしたことだ。同時代の英語もしくはフランス語による日本研究の大部分においては、日本の時代精神との同様の同一化を探してもおそらく無駄であろう。」⁽¹²⁾

1936年にヴィルヘルム・グンデルト (Wilhelm Gundert, 1880-1971) がハンブルグでフローレンツの後継に任命されるに至った詳しい経緯は分かっていない。⁽¹³⁾しかし確かに言えるのは、彼が1934年からナチ党員 (国民社会主義ドイツ労働者党) であったことと、彼の就任演説には明らかに彼の心情が表れ出ていることである。⁽¹⁴⁾彼の主著『日本宗教史』(Japanische Religionsgeschichte, 1935年) は、神道の記述において、当時支配的だった国家神道の観点に強く依拠している。またこの著作は、神道の神社に関するやや短めの節を含んでいる。⁽¹⁵⁾神社施設の典型的構造が説明され、重要な神社が列挙されている。明治以来の「神道の新しい制度」を論じた章では神仏分離や社格制度についての短い記述がある。

プロテスタントの伝道師ゲアハルト・ローゼンクランツ (Gerhard Rosenkranz) によって書かれ1944年に出版された著作『神々の道 (神道)』(Der Weg der Götter (Shintô)) もまた、国家神道の精神による影響を完全に受けている。ローゼンクランツは特に神話と多様な神格に集中して叙述を行っている。「国家神道の宗祀」⁽¹⁶⁾という題の神社に関する章は非常に短く、もっぱら典型的な神社施設の構造について記述している。神社についてはさらに他のいくつかの箇所でも言及されている。例えばこの本は伊勢神宮についての考察を含んだ記述によって始まっており、また社格制度

や靖国神社についても書かれている⁽¹⁷⁾。

第二次大戦前と戦時中に神道研究に取り組んだ日本学者としては、ヘルマン・ボーネル (Hermann Bohner, 1884-1963)、ハインリヒ・デュモリン (Heinrich Dumoulin, 1905-1995)、そしてホルスト・ハミツチュ (Horst Hammitzsch, 1909-1991) がいる。特にボーネルは1941年に伊勢の集団抜け参りについての論考を発表したが、これは強く日本人の論文に依拠している。他にボーネルは国家神道⁽¹⁸⁾にとって中心的なテキストである北畠親房の『神皇正統記』を翻訳している。その序文でボーネルは、北畠親房の日本帝国についての記述を取り上げ、ドイツ人のアイデンティティーもしくはドイツ国家の理念と比較を行った。

ハインリヒ・デュモリンは今日禅の専門家として特に知られている。しかしデュモリンは1943年賀茂真淵についての博士論文を提出し、国学の代表者たちについての一連の論文を書いている。これらの論文は原典からの翻訳を数多く含んでいる⁽¹⁹⁾。

ホルスト・ハミツチュは、1941年にハンス (ヨハネス) ユーバーシャール (Hans (Johannes) Überschaar, 1885-1965) が同性愛による告発の恐れのためにナチのドイツ帝国を追われた後、ライプツィヒ大学での彼の後継となった。この時おそらくハミツチュのナチ政権への忠誠が一役買っただろう⁽²⁰⁾。ハミツチュもまた国学と水戸学の代表者たちについての一連の著作を発表した。しかしボーネル、デュモリン、ハミツチュは特別に神社についての研究を行うことはなかった。総じて言えるのは、第二次大戦までのドイツ語圏での日本学では、文献学的な研究、宗教史・思想史の研究、そして原典の翻訳が中心となっていたということだ。⁽²¹⁾

戦後

上で述べたように、戦前の指導的な神道研究者たちは研究において客観的な距離を取っていなかった。研究テーマの選択 (国学、水戸学) にせよ、あるいはナチズムの語彙を用いた研究成果の発表にせよ、多かれ少なかれ研究者たちの党への際立った忠誠を示すものである。ナチスのイデオロギーへのこうした精神的な近さのせいで、戦後には神道と関わるものがタブー視され、より「無害な」テーマに研究者を向かわせることになった。ボーネルは能演劇を、デュモリンは禅を、ハミツチュは茶道を研究するようになった⁽²²⁾。

民俗学を迂回することによって、神道はようやく日本学研究の中に復活した。ウィーン大学には1938年から1945年まで、実業家の男爵三井高陽の財政的支援を受けた日本学の研究所が存在した⁽²³⁾。研究所の所長は日本民族学者の岡正雄 (1898-1982) であった。しかし彼は戦争のために1940年までしかこの職に就かなかった。戦後の1959年に岡のかつての助手アレクサンダー・スラヴィク (Alexander Slawik, 1900-1999) が、日本に重点を置く民族学の助教授となった。1965年にこの職は再び設立された日本学の研究機関の教授職へと移された。スラヴィク自身はごくわずかしか神道の研究を行っていない⁽²⁴⁾。

スラヴィクの教え子ヨーゼフ・クライナー (Josef Kreiner, 1940-) は、師の後継としてウィーンでの教授職に1971年から77年まで就いた。1977年にクライナーはボンで教授となった。他に彼は1988年に東京のドイツ-日本研究所の設立監督となり、引き続き1996年まで所長として働いた。クライナーは初期の研究で日本の農村の宮座について研究し、福井県の宇波西神社を事例として調

査した。⁽²⁵⁾さらに彼は神体の富士山と三輪山についての論文と阿蘇神社の春祭りの儀式についての論文を書いている。⁽²⁶⁾

しかし、「20世紀後半の日本宗教学の分野で最も影響力のあった研究者」は、ウィーン大学の卒業生ネリー・ナウマン (Nelly Naumann, 1922-2000) である。ナウマンは1946年にウィーンで「日本の習俗と伝説における馬」に関する研究で博士号を取得した。研究の中で彼女はとりわけ神話や神格、そして神道の起源に取り組んだ。ナウマンの主著である『日本の土着の宗教』(Die einheimische Religion Japans) は起源の時代から江戸時代初期までの神道の歴史的発展を扱っている。この非常に包括的な書は、式内社や二十二社といった神社のテーマももちろん含んでいる。⁽²⁷⁾ 稲荷や八幡、あるいは天満天神などの個々の神社が選び出され、詳しく紹介されている。⁽²⁸⁾ 中世における神仏習合の展開が詳細に論じられ、それとともに変化していった神社も同様に論じられる。⁽²⁹⁾ ネリー・ナウマンはボッフム、ミュンスター、フライブルクで日本民俗学を教えた。フライブルクで彼女は1970年から85年まで日本学の教授職にあった。⁽³⁰⁾

カトリックの神父であるマティアス・エーダー (Matthias Eder, 1902-1980) は、雑誌『民俗学研究』(Folklore Studies) (後の『アジア民俗学研究』Asian Folklore Studies) の編集者を長年務め、また南山大学の教授でもあった。彼は1978年に全二巻の『日本宗教史』(Geschichte der japanischen Religion) を出版した。⁽³¹⁾ 第1巻はもっぱら神道について書かれ、神格の扱いが前面に出されている。神社についての章は短く、非常に簡潔な歴史的概観に触れているにすぎない。神社には例えば延喜式との関連などで他の箇所でも言及されている。⁽³²⁾ 第2巻では仏教についての記述が主である。伊勢参りと明治時代の国家神道との関係で神社はたびたび話題にされている。⁽³³⁾ 総じて、エーダーの著作はナウマンの著作のような重要性を獲得するには至っていない。「寺院建築が神社建築にいくつかの本質的ではない影響しかもたらさなかっただろう」というような的を得ていない記述からしても著作を高く評価することはできない。⁽³⁴⁾

エルンスト・ロコバント (Ernst Lokowandt, 1944-) は、1976年に国家神道についての研究でボンにて博士号を取得した。その後彼は1978年から1985年までドイツ東洋文化研究協会の主事を務め、1985年には東洋大学法学部の教授となった。ロコバントは主に神道と国家の関係の研究に取り組んでいる。

1978年にロコバントは博士論を『明治時代前半における国家神道の法的展開 (1868-1890)』(Die rechtliche Entwicklung des Staats-Shintô in der ersten Hälfte der Meiji-Zeit (1868-1890)) というタイトルで出版した。この著作は非常に包括的かつ詳細である。神仏分離のような問題から、神社を管轄する省庁、に至るまで、社格制度や明治時代の神社の状況が詳しく記述されている。この著作はまた、関連する法律 (神仏判然令など) の翻訳が付録されており、非常に役に立つ。

『今日の日本における国家と神道の関係』(Zum Verhältnis von Staat und Shintô im heutigen Japan) という題で、ロコバントは1981年に資料集も編纂している。この本は例えば靖国神社問題に関するテキストや政教分離についての法廷での判決などのドイツ語翻訳などを載せている。

1997年にロコバントは「神社の国家関係—伝統的な特性か明治時代の改変か両方か?」(Die Staatsbezogenheit der Shintô-Schreine: Traditionelles Charakteristikum oder Neuerung der Meiji-Zeit-oder beides?) という論文を発表した。ロコバントによれば、神社の国家関係は奈良・

平安時代にさかのぼる。神祇官は当時の最高位の官職で、神社は延喜式に書いてあるように官社や国幣社などに分類されていた。しかし実際には、数世紀を経るうちに、神社は氏子のために地方的な機能を果たすようになっていった。明治維新の後に神社が国家の祭祀へと転換されてからようやく、国家全体に関連する機能が地方的な機能に加わった。その限りで、神社の国家関係は「真正な伝統と創られた伝統の総合」⁽³⁷⁾によるものだとロコバントはまとめている。ロコバントはさらに1997年、廣瀬和俊が神職の修行と仕事について報告した小冊子を翻訳した。⁽³⁸⁾廣瀬は埼玉県にある三峰神社の神主の家庭に生まれた。彼はまず伊勢神宮で学び、その後35年間三峰神社で権官司もしくは宮司を務めた。この小冊子は神社での日常を見せてくれて非常に興味深い。

2001年にロコバントは『神道入門』(Shintô. Eine Einführung)という本を出した。この本は、題が示すように入門として書かれていながらも非常に深い内容を持っている。最初の10ページは神社の記述に割かれ、神社と氏子の関係や、神主と氏子、神社建築と神社の財政といった事柄が扱われている。⁽³⁹⁾

20世紀の終わりから現在まで

クラウス・アントーニ(Klaus Antoni, 1953-)はまずハンブルグとトリアーで教授職に就き、1998年よりチュービンゲン大学で教鞭をとっている。アントーニはネリー・ナウマンの教え子で、最初に神話史についての研究を行った。これについては『因幡の白兎—神話から昔話へ』(Der weiße Hase von Inaba. Vom Mythos zum Märchen)と『神酒、聖なる飲み物。日本の酒(日本酒)の歴史と宗教的意味』(Miwa, der Heilige Trank. Zur Geschichte und religiösen Bedeutung des alkoholischen Getränkes (Sake) in Japan)の著作が挙げられる。その後、彼は研究の方向を思想史に向けるようになり、特に神道と政治的イデオロギーに取り組んだ。彼の主著『神道と日本国体の構想。近・現代日本の宗教的伝統主義』(Shintô und die Konzeption des japanischen Nationalwesens (kokutai). Der religiöse Traditionalismus in Neuzeit und Moderne Japans)はネリー・ナウマン『日本の土着宗教』(Die einheimische Religion Japans)の第3巻である。この著作は江戸時代から平成初頭までの思想史的發展を扱っている。神社については、伊勢参り、大神神社、靖国問題などとの関連で言及されている。⁽⁴⁰⁾

ベルンハルト・シャイド(Bernhard Scheid, 1960-)は1990年からオーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所で働いている。1997年から彼は吉田神道に取り組み、2001年には『唯一の神の道：吉田兼俱と神道の発明』(Der Eine und Einzige Weg der Götter. Yoshida Kanetomo und die Erfindung des Shinto)を発表した。この著作は吉田神道とその創設者吉田兼俱についての詳細な分析を含んでいる。またその中で大元宮の歴史と象徴性について詳しく解説されている。⁽⁴¹⁾

他に神社についての二つの個別研究を挙げることができる。アンドレア・メツェ(Andrea Metze)は「伊勢神宮の第61回式年遷宮」(Die 61. zyklische Schreinverlegung im Großschrein von Ise)⁽⁴²⁾についての論文を発表した。メツェはまず伊勢神宮の歴史と建築についての概要を述べ、次いで遷宮祭独特の進行と様々な儀式を叙述している。「寺院と神社の財政について」(Zur Finanzierung von Tempeln und Schreinen: Religiöse Dienstleistungen im modernen Japan)⁽⁴³⁾とい

う論文をバーバラ・マンタイ (Barbara Manthey) が発表している。マンタイはその中で、寺院と神社の様々な宗教的サービス (絵馬, お守り, 宮参りの式典など) と、宗教法人に関する税法について分析している。

補足的に、まだ何人かの研究者を紹介する。彼らは特に神社に取り組んではないが、研究の中で神道の諸々の側面に触れている。ヨハネス・ラウベ (Johannes Laube)⁽⁴⁴⁾ は天理教を、ズザンネ・フォルマネク (Susanne Formanek)⁽⁴⁵⁾ は富士講を研究した。インケン・プロール (Inken Prohl)⁽⁴⁶⁾ は霊性的知識人のテーマに取り組み、ワールドメイトに関する研究を発表した。ウルリケ・ヴェーア (Ulrike Wöhr)⁽⁴⁷⁾ はジェンダー問題に主に取り組んでいるが、新宗教における女性についての研究も出版している。ブリギット・シュテムラー (Birgit Staemmler)⁽⁴⁸⁾ は大本教における鎮魂婦神についての研究を発表した。ブリギット・ベルネッガー (Brigitt Bernegger)⁽⁴⁹⁾ はチューリヒ大学に大本教についての博士論文を提出している。

最後に確認しておきたいのは、神道が、第二次大戦による休止期の後に非常にためらいがちにドイツ語圏の日本研究に再び対象として受け入れられたということだ。その際には近代の神道もしくは思想史が前景化された。最近ではさらに新宗教や新新宗教についての研究が増えている。

②……………靖国神社論争

戦争の経験を通じてドイツと日本は過去の克服という問題に同様に直面している。これを背景として考えれば、ドイツ語圏の日本学で靖国神社に関する論争を大きな関心の的となっているのは不思議ではない。神学者・宗教学者のペーター・ゲアリッツ (Peter Gerlitz)⁽⁵⁰⁾ は、靖国神社を例に、神道が持つ象徴性の意味の変遷を研究した。靖国神社の宗教的次元にはクラウス・アントーニが光を当てている。アントーニは神社とその神々を、御霊信仰との関わりから考察している。戦争の慰霊施設としての靖国神社に関する論争については、ミヒャエル・パイ (Michael Pye)⁽⁵²⁾、イリス・ヴィーツォレック (Iris Wiczorek)⁽⁵¹⁾、そしてスヴェン・サーラ (Sven Saaler)⁽⁵²⁾ の研究がある。

イリス・ヴィーツォレックは靖国神社に関する論文を二つ発表した。最初の論文でウィークツォレックは特に第二次大戦前後の靖国神社の歴史を詳述し、神社に関する論争を概観した⁽⁵³⁾。二つ目の論文では2001年8月13日の小泉首相による参拝と、国内外からの反応について論じた⁽⁵⁴⁾。スヴェン・サーラは論文にまず靖国問題の様々な側面を説明している。続いてサーラは近代日本の戦争がアジア解放戦争として紹介されている遊就館の歴史観を分析している。最後にサーラは、論争の中で提案された、慰霊施設としての靖国神社のための様々な代替案、例えば千鳥々淵戦没者墓苑などを紹介している⁽⁵⁵⁾。

③……………神社の建築について

日本建築に関する写真集はドイツ語圏には比較的数量が多い。伝統的な日本建築と庭園のデザインはドイツで大きな関心の的となっている。辰野金吾や安藤忠雄といった近現代の建築家に関する本は珍しくない。対照的に神社建築を扱った文献は比較的まれであるが、1907年に出された『日本

の礼拝建築』(Die Architektur der Kultbauten Japans) という本はその例外である。これは、日本に五年間暮らしたドイツ人技師フランツ・バルツァー (Franz Baltzer, 1857-1927) によって書かれた。バルツァーは東京駅の最初の設計を作成し、駅舎は彼の後を継いだ辰野金吾によって建てられた。バルツァーの本に詳細さで優る文献は今日まで出ていない。墓股 (かえるまた) や持ち送りといった建築の構成部分が紹介され、寺院と神社の様々な建築様式が紹介されている。この本は写真、スケッチ、平面図などが豊富に収録されている。バルツァーは他に、1904年に「東京の靖国神社—日本の近代的な神社建築」(Der Yasukunitempel in Tokio, ein neuzeitlicher Tempelbau Japans) と題する論文を書いている。この論文は非常に包括的かつ詳細である。個々の建築とその構成部分が細部にいたるまで説明されている。数多くの写真、平面図、横断図、細部のスケッチが挿絵として本文に付されている。

日本でも非常に有名なブルーノ・タウト (Bruno Taut, 1880-1938) は、日本建築に関して多くの論文を書いた。しかし彼の場合伝統的な民家の考察と純粋な日本美学が中心である。タウトの『日本の家屋と生活』(Houses and people of Japan) は1937年にまず英語で三省堂から出版された。ドイツ語の最初の版は1997年によく『日本の家屋と生活』(Das japanische Haus und sein Leben) の題で刊行された。この本の中には神社と寺院の建築を扱った章もある。全ての文章からタウトの日本美学への情熱が感じられ、彼はそれを伊勢神宮の簡素さの中にも感じていたが、この本は神社建築についての情報を与えることにはそれほど意を用いてはいない。

ディートリヒ・ゼッケル (Dietrich Seckel, 1910-) は数多くの出版物を通じて東アジアの美術をドイツに知らしめた。彼はこの分野の教授職もハイデルベルク大学で務めた。1942年、彼はオットー・カーロウ (Otto Karow, 1913-1992, フランクフルト大学の東アジア文献学および文化研究の教授) と共著で、『鳥居の起源—比較言語学的・建築学的・宗教学的的研究』を発表した。ゼッケルとカーロウは鳥居という語はさかのほれば「杭、梁、棟木、家の門」という意味であるとした。また建築に関する考察で彼らは鳥居が日本家屋の基礎的な構造の骨組みであると考えた。つまり「切妻側の二つの支柱とそれに横から取り付けられた横桁」である。宗教学的な分析でゼッケルとカーロウは鳥居を喪屋との関係で考察した。喪屋の切妻にはしばしば霊が鳥の形をしてとまるといわれる。

さらにゼッケルは1943年に『大元宮—唯一神道の聖域』(Taigenkyû, das Heiligtum des Yuiitsu Shintô) 詳細な研究を発表した。この論文は大元宮についての記述、歴史的な概観および建築史的な分析を含んでいる。特に屋根の形と八角形構造の象徴性について詳しい。この研究も写真が載せられている。

ブルーノ・タウトの友人であった吉田鉄郎によって、1952年に『日本の建築』(Japanische Architektur) が書かれた。これも神社についての章が設けられており、吉田は様々な神社建築様式についての歴史的概観を記している。多くの写真、スケッチ、平面図がこの章には付せられている。

④……………参考文献目録

参考文献目録は以下のグループに分類されている。

- 研究文献
- 神道研究について
- アウグスト・フィッツマイヤーについて
- カール・フローレンツについて
- ネリー・ナウマンについて
- オーストリアにおける日本研究について
- ナチス時代における日本学について
- 靖国神社論争について
- 神社建築について

研究文献

Antoni, Klaus. *Der himmlische Herrscher und sein Staat. Essays zur Stellung des Tennô im modernen Japan* [天皇と国家。近・現代における天皇の位置を巡るエッセイ] München: Iudicium Verlag, 1991

Antoni, Klaus. *Der weiße Hase von Inaba. Vom Mythos zum Märchen. Analyse eines japanischen "Mythos der ewigen Wiederkehr" vor dem Hintergrund altchinesischen und zirkumpazifischen Denkens* [因幡の白兎—神話から昔話へ。日本の「永遠回帰の神話」の分析—古中国・太平洋地方の思想を背景にして] München: Steiner Verlag, 1982 (Münchener ostasiatische Studien; 28)

Antoni, Klaus. "Die Tokugawa-Zeit verstand zu erben' - Zu den Ise-Wallfahrten der Edo-Zeit" [『徳川時代は相続を心得ていた』—江戸時代の伊勢参りについて] 出典: Scholz-Cionca, Stanca (Hg.) Wasser-Spuren. Festschrift für Wolfram Naumann zum 65. Geburtstag Wiesbaden: Harrassowitz, 1997, p. 34-60

Antoni, Klaus. "Die Trennung von Göttern und Buddhas' (shimbutsu-bunri) am Ômiwa-Schrein in den Jahren der Meiji-Restauration" [明治維新期の大神神社における神仏分離] 出典: Antoni, Klaus (Hg.). Festgabe für Nelly Naumann. Hamburg: OAG, 1993 (MOAG; 119), p. 21-52

Antoni, Klaus. "Engelbert Kaempfers Werk als Quelle der Geschichte des edo-zeitlichen Shintô" [江戸時代の神道史に関する資料としてのエンゲルベルト・ケンペルの著作] 出典: Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Hamburg, 161/162.1997, p. 87-109

Antoni, Klaus. *Miwa, der Heilige Trank. Zur Geschichte und religiösen Bedeutung des alkoholischen Getränkes (Sake) in Japan* [神酒, 聖なる飲物。日本の酒(日本酒)の歴史と宗教的意味] Stuttgart: Steiner Verlag, 1988 (Münchener ostasiatische Studien; 45)

Antoni, Klaus. *Shintô und die Konzeption des japanischen Nationalwesens (kokutai). Der religiöse Traditionalismus in Neuzeit und Moderne Japans* [神道と日本国体の構想。近・現代日本の宗教的伝統主義] Leiden: Brill, 1998 (Handbuch der Orientalistik; V, 8)

Bernegger, Brigitt. *Ômoto-kyô – die Lehre vom grossen Ursprung. Historische, religionsphilosophische und kunstgeschichtliche Aspekte.* [大本教一大いなる起源の教え。歴史的・宗教哲学的・芸術史的側面] Zürich: Kaeser, 1987

Bohner, Hermann (訳および序文). *Kitabatake, Chikafusa. Jinnô-shôtô-ki. Buch von der Wahren Gott-Kaiser-Herrschafts-Linie. Erster Band.* [北畠親房, 神皇正統記—正統的な神権の系譜についての書。第1巻] Tokyo: Japanisch-Deutsches Kulturinstitut, 1935

Bohner, Hermann. “Massen-Nukemairi”. [集団抜け参り] 出典 : Monumenta Nipponica, 4.1941, p. 486-496

Dumoulin, Heinrich. “Die Entwicklung des Kokugaku. Dargestellt in ihren Hauptvertretern”. [国学の展開—主要な国学者たちの視点を基にして] 出典 : Monumenta Nipponica, Vol. 2.1939, p. 140-164

Dumoulin, Heinrich. “Die Geschichte der japanischen Manyôshûforschung von der Heianzeit bis zu den Anfängen der Kokugaku”. [平安時代から国学の創成期までの日本の万葉集研究の歴史] 出典 : Monumenta Nipponica, Vol. 8.1952, p. 67-98

Dumoulin, Heinrich. *Kamo Mabuchi (1697-1769). Ein Beitrag zur japanischen Religions- und Geistesgeschichte. Erster Band: Die Überwindung des Synkretismus.* [賀茂真淵 (1697-1769) — 日本の宗教・思想史に関する論考, 第1巻 : 神仏習合の克服] Toyko: Sophia University, 1943 (Monumenta Nipponica monographs; no. 8)

Dumoulin, Heinrich (翻訳). “Kamo Mabuchi: Kokuikô 國意考 . Gedanken über den Sinn des Landes”. [賀茂真淵 : 國意考—国家の意味についての思考] 出典 : Monumenta Nipponica, Vol. 2.1939, p. 165-192

Dumoulin, Heinrich (翻訳). “Kamo Mabuchis Erklärung des Norito zum Toshi-goi-no-matsuri”. [賀茂真淵による, 祈年祭の祝詞についての説明] 出典 : Monumenta Nipponica, Vol. 12.1956/57, p. 121-156, 269-298

Dumoulin, Heinrich (翻訳). “Sô-gakkô-kei. Kada Azumamaro's Gesuch um die Einrichtung einer Kokugaku-Schule”. [創學校啓。荷田春満による国学学校設立の申請書] 出典 : Monumenta

Nipponica, Vol. 3.1940, p. 590-609

Dumoulin, Heinrich (翻訳). Ishibashi, T. (翻訳). “Yuiitsu-Shintô Myôbô-yôshû. 唯一神道名法要集 *Lehrbriss des Yuiitsu-Shintô*”. [唯一神道名法要集。唯一神道の学習用梗概] 出典：Monumenta Nipponica, Vol. 3.1940, p. 182-239

Eder, Matthias. *Geschichte der japanischen Religion 1. Die alte Landesreligion*. [日本宗教史 1. 古代土着宗教] Nagoya: Asian Folklore Studies, 1978 (Asian Folklore Studies. Monograph; no. 7, 1)

Eder, Matthias. *Geschichte der japanischen Religion 2. Japan mit und unter dem Buddhismus*. [日本宗教史 2. 仏教とともにある日本, 仏教の下にある日本] Nagoya: Asian Folklore Studies, 1978 (Asian Folklore Studies. Monograph; no. 7, 2)

Florenz, Karl. “A. *Der Shinto*”. [神道] 出典：Bertholet, Alfred (Hg.). *Lehrbuch der Religionsgeschichte*. 1. Band. 4., vollständig neubearbeitete Aufl., Tübingen: Mohr, 1925, p. 264-348

Florenz, Karl (翻訳). *Die historischen Quellen der Shinto-Religion*. [神道の歴史書] Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1919 (Quellen der Religionsgeschichte; Gruppe 9, Bd.7)

Florenz, Karl. *Japanische Mythologie. Nihongi “Zeitalter der Götter”. Nebst Ergänzungen aus andern alten Quellenwerken*. [日本の神話。日本紀「神々の時代」—その他の原典からの補足とともに] Tokyo: Hobunsha, 1901 (Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens; Supplementband)

Formanek, Susanne. “*Anmerkungen zur Geschichte des Fuji-Kultes*” [富士信仰の歴史についての注解] 出典：Minikomi, Informationen des Akademischen Arbeitskreises Japan, 2000, Nr. 2 (Juni), p. 5-12

Formanek, Susanne. “*Die edo-zeitliche Fuji-kô: eine ‚alte Neureligion‘ zwischen Subversion und Nationalismus*” [江戸時代の富士講：転覆とナショナリズムの間の旧新宗教] 出典：Eisenhofer-Halim, Hannelore (Hg.). *Wandel zwischen den Welten*. Festschrift für Johannes Laube. Frankfurt am Main: Lang, 2003, p. 147-179

Gundert, Wilhelm. *Japanische Religionsgeschichte. Die Religionen der Japaner und Koreaner in geschichtlichem Abriß dargestellt*. [日本宗教史—歴史的な概観による日本と韓国の宗教] Stuttgart: Gundert, 1935. Tôkyo: Japanisch-Deutsches Kulturinstitut, 1935

Hammitzsch, Horst. *“Die Kokugaku. Ein Überblick über ihre Entwicklung und ihre Bedeutung in der japanischen Geistesgeschichte”*. [国学—日本の思想史におけるその展開と意味についての概観] 出典 : Nachrichten der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, No. 47, 1938, p. 23-29

Hammitzsch, Horst. *Die Mito-Schule und ihre programmatischen Schriften in Übersetzung: Ein Beitrag zur Geistesgeschichte der Tokugawa-Zeit*. [水戸学派とその綱領的著作の翻訳 : 徳川時代の思想史に関する論考] Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1930 (Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens; 31,B)

Hammitzsch, Horst. *“Hirata Atsutane. Ein geistiger Kämpfer Japans”*. [平田篤胤—日本の精神的闘士] 出典 : Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (Hrsg.). *Der japanische Geist. Nihon seishin*. Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1934, p. 1-27

Hammitzsch, Horst. *“Kangaku und Kokugaku. Ein Beitrag zur Geistesgeschichte der Tokugawazeit”*. [漢学と国学。徳川時代の精神史に関する論考] 出典 : Monumenta Nipponica, Vol. 2.1939, p. 1-23

Hammitzsch, Horst. *“Die völkische Wiederbesinnung im Schrifttum des 18. und 19. Jahrhunderts in Deutschland und Japan”*. [18, 19 世紀のドイツおよび日本の文献における民族的意識の取り戻し] 出典 : Das Reich und Japan. Berlin: Junker und Dünnhaupt, 1943 (Veröffentlichungen des deutschen auslandswissenschaftlichen Instituts; 8) p. 159-187

Hirose, Kazutoshi. Lokowandt, Ernst (翻訳). *Beruf: Shintô-Priester*. [神官の職] Tokyo: Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1997 (OAG Taschenbuch; Nr. 68)

Kaempfer, Engelbert. *Heutiges Japan*. [今日の日本] Hrsg. von Wolfgang Michel. München: Ludicum, 2001 (Engelbert Kaempfer. Werke. Kritische Ausgabe in Einzelbänden ; 1/1)

Kreiner, Josef. *Die Kultorganisation des japanischen Dorfes*. [日本の村における礼拝組織] Wien: Braumüller, 1969 (Veröffentlichungen zum Archiv für Völkerkunde; 7)

Kreiner, Josef. *“Heilige Berge Japans. Miwa und Fuji”*. [日本の聖なる山—三輪と富士] 出典 : Gratzl, Karl (Hg.) *Die heiligsten Berge der Welt*. Graz: Verlag für Sammler, 1990, p.139-152

Kreiner, Josef. *“Zur Entwicklung der Gottesvorstellung im Schrein-Shintô. Die Frühjahrszeremonie*

des Aso-Schreins” [神社神道における神の表象の発展について—阿蘇神社の春祭りの儀式] 出典 : Kreiner, Josef (Hg.). Festgabe Herbert Zachert 70 Jahre. Bonn: Förderverein “Bonner Zeitschrift für Japanologie”, 1979 (Bonner Zeitschrift für Japanologie; 1) p. 201-218

Laube, Johannes *Oyagami. Die heutige Gottesvorstellung der Tenrikyô*. [親神。天理教における現在の神の表象について] Wiesbaden: Harrassowitz, 1978 (Studien zur Japanologie: Monographien zur Geschichte, Kultur und Sprache Japans; 14)

Lokowandt, Ernst. *Die rechtliche Entwicklung des Staats-Shintô in der ersten Hälfte der Meiji-Zeit (1868-1890)* [明治時代前半における国家神道の法的発展 (1868-1890)] Wiesbaden: Harrassowitz, 1978 (Studies in Oriental Religions; 3)

Lokowandt, Ernst. “*Die Staatsbezogenheit der Shintô-Schreine: Traditionelles Charakteristikum oder Neuerung der Meiji-Zeit - oder beides?*” [神社の国家関係—伝統的な特性か明治時代の改変か両方か?]. 出典 : Antoni, Klaus (Hg.). *Rituale und ihre Urheber. Invented Traditions in der japanischen Religionsgeschichte*. Hamburg: Lit, 1997 (Ostasien-Pazifik. Trierer Studien zu Politik, Wirtschaft, Gesellschaft, Kultur; Bd. 5) p. 127-142

Lokowandt, Ernst. *Shintô. Eine Einführung*. [神道入門] München: ludicium, 2001

Lokowandt, Ernst (Hg./Übers.). *Zum Verhältnis von Staat und Shintô im heutigen Japan Eine Materialsammlung*. [今日の日本における国家と神道の関係—資料集] Wiesbaden: Harrassowitz, 1981 (Studies in Oriental Religions; 6)

Manthey, Barbara. “*Zur Finanzierung von Tempeln und Schreinen: Religiöse Dienstleistungen im modernen Japan*” [寺院と神社の財政について—現代日本の宗教的サービス] 出典 : Beiträge zur Japanforschung. Festgabe für Peter Pantzer zu seinem sechzigsten Geburtstag. Bonn: Bier'sche Verlagsanstalt, 2002 (Edition Japan; Bd. 2) p. 179-211

Metze, Andrea. “*Die 61. zyklische Schreinverlegung im Großschrein von Ise*”. [伊勢神宮の第61回式年遷宮] 出典 : Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Hamburg, 163/164.1998, p. 23-47

Naumann, Nelly. “*Das Pferd in Brauchtum und Sage Japans*”. [日本の習俗と伝説における馬] 出典 : Folklore Studies 18.1959, p. 145-287

Naumann, Nelly. *Die einheimische Religion Japans. Teil 1: Bis zum Ende der Heian-Zeit*. [日本

の土着宗教。第1巻 平安時代の終わりまで] Leiden: Brill, 1988 (Handbuch der Orientalistik: 5. Abt.; 4,1)

Naumann, Nelly. *Die einheimische Religion Japans. Teil 2: Synkretistische Lehren und religiöse Entwicklungen von der Kamakura- bis zum Beginn der Edo-Zeit.* [日本の土着宗教。第2巻 鎌倉時代から江戸時代初期までの習合的理論と宗教的展開] Leiden: Brill, 1994 (Handbuch der Orientalistik: 5. Abt.; 4,2)

Prohl, Inken. *Die "spirituellen Intellektuellen" und das New Age in Japan.* [日本の「霊性的知識人」とニューエイジ] Hamburg: Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens e.V., 2000 (Mitteilungen der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens; Bd. 133)

Prohl, Inken. *Religiöse Innovationen. Die Shintô-Organisation World Mate in Japan.* [宗教的改新—日本の神道団体ワールドメイト] Berlin : Reimer, 2006

Rosenkranz, Gerhard. *Der Weg der Götter (Shintô). Gehalt und Gestalt der japanischen Nationalreligion.* [神々の道(神道)—日本の国家宗教の内実と形態] München: Verlag Arbeitsgemeinschaft für Zeitgeschichte, 1944

Scheid, Bernhard. *Der Eine und Einzige Weg der Götter. Yoshida Kanetomo und die Erfindung des Shinto* [唯一の神の道: 吉田兼俱と神道の発明]. Wien: Verlag der Akademie der Wissenschaften, 2001.

Schiller, Emil. *Shintô, die Volksreligion Japans.* [日本の民族宗教 神道] Berlin-Schöneberg: Verlag Protestantischer Schriftenvertrieb, 1911

Siebold, Philipp Franz von. *Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan.* [日本—日本とその隣国] Würzburg und Leipzig: Woerl, 1897. 2 Bde.

Slawik, Alexander. "Die Susanowos. Vielerlei Gestalten unter einem Namen, ihre Mythen, Sagen und die ältesten chinesischen Japanberichte". [スサノオたち—一つの名前をもった多様な形姿, その神話, 伝説そして最古の中国による日本報告] 出典: Antoni, Klaus (Hg.). Festgabe für Nelly Naumann. Hamburg: Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1993 (Mitteilungen der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens; 119) p. 341-351

Slawik, Alexander. "Zum Problem des ‚Sakralen Besuchers‘ in Japan". [日本の『聖なる訪問者』の問題について] 出典: Kluge, Inge Lore (Hg.). Ostasiatische Studien. Martin Ramming zum 70.

Geburtstag gewidmet. Berlin: Akademie-Verlag, 1959 (Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Institut für Orientforschung; Veröffentlichungen; Nr. 48) S. 196-207

Staemmler, Birgit. *Chinkon kishin. Mediated spirit possession in Japanese New Religions*. [鎮魂婦神—日本の新宗教における霊媒術] Münster: Lit, 2003

Staemmler, Birgit. “*Das chinkon kishin der Ômoto in der Taishô-Zeit*”. [[大正時代の大本教の鎮魂婦神] 出典: Gössmann, Hilaria (Hg.). 1. Deutschsprachiger Japanologentag in Trier 1999. Band 1. Geschichte, Geistesgeschichte/Religionen, Gesellschaft, Politik, Recht, Wirtschaft. Hamburg: Lit, 2001 (Ostasien-Pazifik: Trierer Studien zu Politik, Wirtschaft, Gesellschaft, Kultur; Bd. 13) p. 243-249

Wöhr, Ulrike. *Frauen und neue Religionen. Die Religionsgründerinnen Nakayama Miki und Deguchi Nao*. [女性たちと新宗教—宗教創設者の中山みきと出口直] Wien: Institut für Japanologie, Universität Wien, 1989 (Beiträge zur Japanologie; Bd. 27)

Wöhr, Ulrike. “*Die neuen Religionen - Möglichkeit der Konfliktbewältigung für Frauen?*” [新宗教—女性たちにとってトラブルを克服する可能性か?] 出典: Linhart-Fischer, Ruth (Hg.). *Japans Frauen heute. Vom Stereotyp zur Wirklichkeit*. Wien: Literas, 1988, p. 183-186

神道研究について

Scheid, Bernhard. “*Deutschsprachige Shinto-Forschung im 20. Jahrhundert*”. [二十世紀のドイツ語圏における神道研究] 出典: Domenig, Roland (Hg.) *Über Japan denken – Japan überdenken*. Wien: Lit Verlag, 2005 (Kultur Forschung Wissenschaft ; 3), p. 279-302

ベルンハルト・シャイド [Bernhard Scheid] 「二十世紀のドイツ語圏における神道研究」 國學院大學 21 世紀 COE プログラム編 『神道・日本文化研究国際シンポジウム (第1回) 各国における神道研究の現状と課題』 東京, 2003 年. p. 8-23

アウグスト・フィッツマイヤーについて

Ladstaetter, Otto (Hg.). *August Pfizmaier (1808-1887) und seine Bedeutung für die Ostasienwissenschaften*. [アウグスト・フィッツマイヤー (1808-1887) とその東アジア学における意味] Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1990. (Schriftenreihe Beiträge zur Kultur- und Geistesgeschichte Asiens; 3. Österreichische Akademie der Wissenschaften: Philosophisch-Historische Klasse: Sitzungsberichte; 562)

Pantzer, Peter. *August Pfizmaier 1808-1887: Katalog zur Ausstellung anlässlich des 100.*

Todestages des österreichischen Sinologen und Japanologen, Österreichische Nationalbibliothek, 18.-29. Mai 1987. [アウグスト・フィッツマイヤー 1808-1887 : オーストリアの中国・日本学者の百回忌記念展示のカタログ] Wien: Literas, 1987

Walravens, Hartmut. *August Pfizmaier. Sinologe, Japanologe und Sprachwissenschaftler. Eine Biobibliographie.* [アウグスト・フィッツマイヤー—中国学者, 日本学者, そして言語学者。伝記・文献目録] Hamburg: Bell, 1084 (Han-pao tung-Ya shu-chi mu-lu; 2)

Kreiner, Josef (Hg.). *Japanforschung in Österreich.* [オーストリアにおける日本研究] Wien, Institut für Japanologie, Universität Wien, 1976.

カール・フローレンツについて

Schneider, Roland. *“Karl Florenz (1865-1939), der Begründer der deutschen Japanologie.”* [「カール・フローレンツ (1865-1939), ドイツの日本学創始者」] 出典: Japanisches Kulturinstitut Köln (Hg.). *Kulturvermittler zwischen Japan und Deutschland.* Frankfurt: Campus Verlag, 1990, S.149-161

Worm, Herbert. *“War Karl Florenz ein Verehrer Adolf Hitlers?”* [カール・フローレンツはアドルフ・ヒトラーの崇拝者だったか?] 出典: *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*, Hamburg, 144.1988. p. 29-49

Satô, Masako. *Karl Florenz in Japan. Auf den Spuren einer vergessenen Quelle der modernen japanischen Geistesgeschichte und Poetik.* [日本におけるカール・フローレンツ—近代日本の精神史および詩学の忘れられた源流をたずねて] Hamburg: Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1995 (Mitteilungen der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens; Bd. 124)

ネリー・ナウマンについて

Blümmel, Maria-Verena. Antoni, Klaus. *“In memoriam Nelly Naumann”* [ネリー・ナウマンの思い出] 出典: *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*, 167-170. 2000-2001, p. 7-14

Linhart, Sepp. *“Erinnerungen an Nelly Naumann (1922-2000).”* [ネリー・ナウマンの思い出 (1922-2000)] 出典: *Informationen des Akademischen Arbeitskreises Japan*. Minikomi, 2000, Nr. 4, p. 5-6

オーストリアにおける日本研究について

Kreiner, Josef (Hg.). *Japanforschung in Österreich.* [オーストリアの日本研究] Wien: Institut für Japanologie der Universität Wien, 1976

Kreiner, Josef. *“Japanische Volks- und Völkerkunde und ihre Kontakte zur Völkerkunde und Japanforschung im deutschen Sprachraum”*. [日本の民俗学・民族学と、ドイツ語圏の民俗学および日本研究へのその接点] 出典: Kornadt, Hans-Joachim (Hg.). *Deutsch-japanische Begegnungen in den Sozialwissenschaften. Wiederbeginn wissenschaftlicher Kooperation in gesellschaftsbezogener Forschung*. Konstanz: Universitätsverlag Konstanz, 1993 (Konstanzer Beiträge zur sozialwissenschaftlichen Forschung; 6) p. 85-102

Linhart, Sepp. *“Japanforschung in Österreich: 1975-1993”*. [オーストリアにおける日本研究: 1975-1993] 出典: Linhart, Sepp. *Japanologie heute. Zustände – Umstände*. Wien: Institut für Japanologie, Universität, 1993 (Schriftenreihe Beiträge zur Japanologie; Bd. 31) p. 37-77

ナチス時代における日本学について

Hack, Annette. *“Das Japanisch-Deutsche Kulturinstitut in Tôkyô zur Zeit des Nationalsozialismus. Von Wilhelm Gundert zu Walter Donat”*. [国家社会主義時代の東京における日本—ドイツ文化研究所—ヴィルヘルム・グンデルトからヴァルター・ドナートまで] 出典: *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* 157-158.1995, p. 77-100

Worm, Herbert. *“Japanologie im Nationalsozialismus. Ein Zwischenbericht”*. [国家社会主義での日本学—中間報告] 出典: Gerhard Krebs (Hg.). *Formierung und Fall der Achse Berlin-Tôkyô*. München: Iudicium, 1994, S. 153-186 (Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung; 8)

靖国神社論争について

Antoni, Klaus. *“Yasukuni und der “Schlimme Tod” des Kriegers”* [靖国と兵士の「御霊・怨霊」] 出典: *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung*, 10.1987, p. 161-192

Antoni, Klaus. *“Yasukuni-Jinja and folk religion: The problem of vengeful spirits”* [靖国神社と民俗宗教—怨霊の問題] 出典: *Asian Folklore Studies*, 47.1988, 1, p. 123-136

Gerlitz, Peter. *“Der Bedeutungswandel in der Shintô-Symbolik, dargestellt an den ideologischen Auseinandersetzungen um den Yasukuni Schrein in Tokyo”*. [東京, 靖国神社を巡るイデオロギー的論争にみる神道の象徴的表現の変遷] 出典: *Symbolon. Jahrbuch für Symbolforschung*. NF 5.1980, p. 41-60

Pye, Michael. *“Yasukuni Jinja als umstrittene Kriegsgedenkstätte”*. [議論の的の戦争追悼施設としての靖国神社] 出典: *Die Philipps-Universität Marburg im Nationalsozialismus*. Marburg: Konvent

der Philipps-Universität, 1996, p. 267-272.

Saaler, Sven. “*Ein Ersatz für den Yasukuni-Schrein? Die Diskussion um eine neue Gedenkstätte für Japans Kriegsofper*”. [靖国神社の代わりは？日本戦死者のため新しい追悼施設を巡る議論] 出典：Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 175/176.2004, p. 59-91

Wieczorek, Iris. “*Koizumis Besuch des Yasukuni-Schreins - Ein Überblick*”. [小泉首相の靖国参拝—概観] 出典：Japan aktuell. Wirtschaft, Politik, Gesellschaft, 9.2001, Heft 5, p. 486-489

Wieczorek, Iris. “*Kontroversen um den Yasukuni-Schrein: Kriegsmahnmal oder Symbol eines japanischen Nationalismus?*” [靖国神社をめぐる論争：戦争の記念碑か日本のナショナリズムの象徴か？] 出典：Japan aktuell. Wirtschaft, Politik, Gesellschaft, 9.2001, Heft 4, p. 382-389

神社建築について

Baltzer, Franz. “*Der Yasukunitempel in Tokio, ein neuzeitlicher Tempelbau Japans*”. [東京の靖国神社—日本の近代的神社建築] 出典：Zentralblatt der Bauverwaltung. 24.1904, p. 77-80, 89-93, 104-106

Baltzer, Franz. *Die Architektur der Kultbauten Japans*. [日本の礼拝建築] Berlin: Ernst, 1907

Karow, Otto. Seckel, Dietrich. *Der Ursprung des Torii. Eine sprachvergleichende, architekturkundliche und religionswissenschaftliche Untersuchung*. [鳥居の起源—比較言語学的・建築学的・宗教学的的研究] Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1942 (Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens; Bd. 33, Teil B)

Seckel, Dietrich. “*Taigenkyû das Heiligtum des Yuiitsu-Shintô. Eine Studie zur Symbolik und Geschichte der japanischen Architektur*”. [大元宮—唯一神道の聖域. 日本建築の象徴性と歴史に関する研究] 出典：Monumenta Nipponica, 6.1943, p. 52-85

Taut, Bruno. Manfred Speidel (Hg.). *Das japanische Haus und sein Leben. Houses and people of Japan*. [日本の家屋と生活] Berlin: Gebr. Mann, 1997

Yoshida, Tetsuro. *Japanische Architektur*. [日本の建築] Tübingen: Wasmuth, 1952

註

- (1)——ドイツにおける神道研究に関してはシャイド 2003 と Scheid 2005 を参照
- (2)——Antoni 1998 : 112ff., Antoni 1997
- (3)——Kaempfer 2001 : 176
- (4)——Kaempfer 2001 : 176
- (5)——フィッツマイヤーの著作については Kreiner 1976 : 7-52 を参照
- (6)——柳亭種彦著『浮世形六枚屏風』のドイツ語訳が 1847 年にウイーンで出版された。ドイツ語訳に並んで、日本語の原文も掲載されており、その時代では優れている刊行物であった。紙と装釘も和式であったが、残念ながら小説としては西洋の読者の関心を得られなかった。Kreiner 1976 : 9-13 を参照
- (7)——1954 年からはハンブルクにある O A G で出版されている。ハンブルクの O A G は東京の O A G と同じ名前だが、東京の O A G と別の研究協会である。
- (8)——Florenz 1901, Florenz 1919
- (9)——Florenz 1925 : 311-319
- (10)——Florenz 1925 : 326ff., 332ff., 338ff., 341ff.
- (11)——Schiller 1911 : 45
- (12)——Scheid 2005 : 288
- (13)——Vgl. Worm 1994 : 165-172
- (14)——Vgl. Worm 1994 : 169-170
- (15)——Gundert 1935 : 15-18
- (16)——Rosenkranz 1944 : XIV
- (17)——Rosenkranz 1944 : 1ff, 86, 111ff
- (18)——Vgl. Bohner 1941 : 488
- (19)——参考文献目録の研究文献 : Dumoulin を参照
- (20)——Worm 1994 : 174-178, Schad 2005 : 284-285
- (21)——参考文献目録の研究文献 : Hammitzsch を参照
- (22)——Vgl. Scheid 2005 : 288-289
- (23)——参考文献目録のオーストリアにおける日本研究を参照
- (24)——参考文献目録の研究文献 : Slawik を参照
- (25)——Kreiner 1969
- (26)——Kreiner 1990, Kreiner 1979
- (27)——Scheid 2005 : 291
- (28)——Naumann 1959
- (29)——Naumann 1988 : 187 ff., 230ff.
- (30)——Naumann 1988 : 193ff., 198ff., 216ff.
- (31)——Naumann 1988 : 221ff., Naumann 1994 : 1-74, 204ff.
- (32)——Eder 1978
- (33)——Eder 1978 (Bd.1) : 255-257
- (34)——Eder 1978 (Bd.1) : 289ff.
- (35)——Eder 1978 (Bd.2) : 163ff., 184ff.
- (36)——Eder 1978 (Bd.1) : 257
- (37)——Lokowandt 1997 : 140
- (38)——Hirose 1997
- (39)——Lokowandt 2001 : 11-22
- (40)——Antoni 1998 : 94ff, 191ff, 336ff, s.a. Antoni 1997, Antoni 1993
- (41)——Scheid 2001 : 38-63
- (42)——Metze 1998
- (43)——Manthey 2002
- (44)——Laube 1978
- (45)——Formanek 2000, Formanek 2003
- (46)——Prohl 2000, Prohl 2006
- (47)——Wöhr 1988, Wöhr 1989
- (48)——Staemmler 2001, Staemmler, 2003
- (49)——Bernegger 1987
- (50)——Gerlitz 1980
- (51)——Antoni 1987, Antoni 1988
- (52)——Pye 1996
- (53)——Wieczorek 2001, Heft 4
- (54)——Wieczorek 2001, Heft 5
- (55)——Saaler 2004
- (56)——Baltzer 1907 : 23, 50-53
- (57)——Taut 1997 : 135-160
- (58)——Karow, Seckel 1942 : B13
- (59)——Karow, Seckel 1942 : B16

(ドイツ - 日本研究所, 国立歴史民俗博物館共同研究員)
(2008年6月17日受理, 2008年7月29日審査終了)

Works on Shintô Shrines in German Japanese Studies

Ursula FLACHE

In this paper, an overview will be given of works on Shintô shrines in Japanese Studies in Germany. One has to bear in mind that research on Japanese religions is just one of many topics in German Japanese Studies. Furthermore, the research on Shintô or Shintô shrines is again only a sub-topic of Japanese religions. Consequently, the number of works exclusively on Shintô shrines is very limited. However, the topic of shrines often comes up in research on other aspects of Shintô. In the historic overview, first the findings of early researchers such as Kaempfer, Siebold and Pfizmaier will be presented. In the chapter on the Meiji period to World War II, the works of scholars such as Florenz, Schiller, Rosenkranz and Schurhammer will be examined. In addition, the research of scholars who are now seen as being close to Nazi ideology (Gundert, Bohner, Hammitzsch) will be introduced. Because of this connection to Nazi ideology, studies on Japanese Shintô after the war were stigmatized in Germany and neighboring countries. In the chapter on post-war studies, it will be shown how the topic of Shintô is finally taken up again in folklore studies at Vienna University. Naumann, a graduate of Vienna University, becomes the dominant scholar on Shintô in the post-war period. Another researcher who contributes to studies on shrines is Lokowandt who mainly deals with the relationship of Shintô and State. In the chapter that covers the period of the end of the 20th century until now, the works of the two current main Shintô scholars Antoni and Scheid will be presented. In addition, Metze and Manthey who have published single papers on shrines will be considered. As Germany and Japan face the same task of how to come to terms with their past, the problem of the Yasukuni Shrine is of special interest to German Japanology. In the chapter on the Yasukuni Shrine, the works of Gerlitz, Antoni, Pye, Wiczorek and Saaler who study the history as well as the current discussion concerning the Yasukuni Shrine will be presented. The paper closes with a chapter on German studies on shrine architecture. Baltzer has published a very detailed book on Japanese religious architecture. Also, Seckel and Karow discuss shrine architecture in two papers. Taut has published widely on Japanese architecture, but as his work mainly deals with aesthetics it is not very informative concerning shrine architecture.